
夢をとめないでいて

ともゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢をとめないでいて

【Nコード】

N2139F

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

難病の少女の手術に必要な輸血用血液が盗まれた！果たしてコナンたちは血液を取り戻し、少女の命を救うことができるのか？

第1話

2008年7月のある日の早朝、米花町の中にある米花公園。

その周りのアスファルトの道を何人もの人々が走っていた。

健康維持のためだろうか、五十代、六十代と思しき人もいれば、この間学校が夏休みに入ったからだろうか、小中学生が走っている姿も多いようである。

そんな中、一人のトレーニングウェア姿の少女がその道を走っていた。

この近くにある帝丹高校に通う毛利蘭である。

蘭は帝丹高校に入学し、空手部に所属してから今日まで、こうして学校が休みの時には米花公園の周りでランニングをするのが日課となっていた。米花公園の周りの道と言うのは距離も程よい長さで、ランニングをするのは絶好のコースだったのだ。

蘭の傍らを向こうから走ってきた人物が通り過ぎた。

「おはよう」

「おはようございます」

彼女と同じ考えを持っているのだろうか、結構この道を走っている人も多く、蘭自身毎朝のように顔を合わせる顔見知りの人物も多いのだ。

米花公園1周のランニングを終えると、蘭はうつすらと汗をかいていた。

「はあ…はあ…はあ…」

そして蘭が息を整え、首にかけていたタオルで汗をふき取っていた時だった。

彼女の傍らを1台の車椅子が通り過ぎた。

「あれ…？」

蘭は自分の傍らを通り過ぎた車椅子を見てつぶやいた。

そう、その車椅子はいわゆる普通の車椅子ではなく、前輪が1輪、後輪が2輪でその後輪が「ハ」の字型をしていた、いわば三輪自転車のハンドルとサドルを取ったような形をしていたのだ。

「今の車椅子、あれレース用の車椅子よね…」

蘭自身、レース用の車椅子と言うのはテレビなどで見たことがあるが、実物を見るのは初めてだった。

「…あの人もトレーニングか何かしているのかな？」

そういえば、その車椅子に載った人物はヘルメットをかぶっていたようだった。

*

そして、その車椅子は、次の日も、そのまた次の日も蘭が米花公園の周りを走っていたときに蘭の傍らを通り過ぎた。

そうしているうちに何か蘭もその車椅子に乗った人物に興味を覚えるようになっていった。

そんなことが4～5日過ぎた日のことだった。

蘭はランニングを終えると、その7～8メートル先に例のレース用車椅子が止まっていた。

と、その車椅子に乗っていた人物がかぶっていたヘルメットを脱ぎ、かけていたサングラスをはずした。

「あ、女の人だったんだ…」

蘭がつぶやいた。そう、車椅子と言うこともあって、あつという間に蘭の傍らを通り過ぎていってしまうことと、その人物がヘルメットをかぶっていたこともあってじっくりと見たことがなかったのだが、その車椅子に乗っていたのは女性だったのだ。

蘭は思い切ってその車椅子の女性の側に近づいていった。

「…最近よくお見かけしますね」

蘭が話しかけた。と、その女性も、

「あら、あなたは…」

どうやら相手の女性も蘭に気がついたようだ。

「はい。私もこの辺を走っているんです」

「そうよね。この辺はランニングするのに適当なコースだからね」

そして二人は近くのベンチに移動した。

「あ、そうか…」

蘭がその女性——藤田貴代と名乗った——が足が不自由だということに気づくと、ベンチに移そうと手助けをしようとした。が、藤田貴代は、

「あ、大丈夫よ」

そういうと彼女は両腕だけの力で器用に車椅子からベンチに移り、そこに腰掛けた。

「随分と器用ですね」

「もうこういうのには慣れてるからね」

蘭はその動作に感心しながら、その隣に腰掛ける。

「…それで、いつもここを走っているんですか？」

蘭は藤田貴代に聞いた。

「そう。私、この近くに住んでるから」

「へえ、この近くに住んでいるんですか」

「そう。それに北京も近いからね。最近は朝と夕方の2回走っているの」

「北京？」

「9月に北京でパラリンピックがあるのよ。私もその車椅子マラソンに日本代表として出場するの」

「ああ、パラリンピックですか…」

パラリンピックなら蘭も聞いたことがある。確かオリンピックが開催されるのと同じ年に、オリンピックの開催地で行われる障害者スポーツの世界的な大会、いわば「障害者のオリンピック」で、今年は北京でオリンピックが開催されるから、その後に開催されるはずである。

「そう。実はこれも大会のときに使う車椅子なの。マラソンと行ったら42キロも走るから、車椅子もそれ用に作った特別製の車椅子なのよ」

藤田貴代が自分の乗っていた車椅子を指しながら言う。

「…ふーん…」

「ところで、話は変わるけど、蘭さんは何かスポーツやってるの？」

「え？ ええ。一応空手を」

「空手か…。私は昔から走ることが好きだったの」

「短距離ですか？ 長距離ですか？」

「私は長距離、特にマラソンが好きだったわ。小学生のときには校内のマラソン大会はいつも1位で、都の大会にも何度も出たことがあったのよ。それで、ちょうどその頃オリンピックの陸上で女子のマラソンが始まったから、将来の夢はオリンピックに出て、マラソンで金メダルを取ることって卒業文集に書いたことがあるのよ」

「そうですか」

「それで中学でも陸上部に入ったんだけど、実は、一度はその夢をあきらめかけたのよ」

「あきらめかけた、って…」

「…中学2年のとき、私、交通事故に遭ったのよ」

「交通事故に？」

「そう。それで命は取り留めたんだけど、そのときに脊髄を損傷して、二度と歩けない体になっちゃったのよ。私、そのときからずっと車椅子に乗ってるの」

「そうだったんですか…」

藤田貴代の話聞いた蘭は言葉を失ってしまった。

「…さすがに私も落ち込んだわ。走ることが大好きだったのに、ある日突然走るところか、歩くこともできなくなっちゃったんですもの。走れなきや意味がない、って思って一時は自殺を考えたくらいだったんですもの。…でも、丁度その頃に知ったのよ、障害者スポーツやパラリンピックのことを。そういった話を聞いているうちに、

だんだんと興味がわいてきて、またやる気が出てきたの。オリンピックがだめなら、パラリンピックがある。パラリンピックでも車椅子マラソンがあるなら、それで金メダルを取ればいい、って」

「…」

「でもそれからは大変だったわ。私が車椅子マラソンを始めたころは、日本じゃまだまだこういった障害者スポーツに対する関心が今ほど高くなかったから、周りの人に理解してもらうのにも時間がかかったし、練習もなかなか思うようにできなかったし…。でも練習をしているうちに回りも次第に理解してくれるようになったし、障害者スポーツを通じて知り合ったある人がコーチ——今も私のコーチをしてもらっているんだけど——を紹介してくれて、その人の下で練習したおかげで、私もかなり自信を付けてきたのよ」

「そうなんですか…」

「…それでいろいろな障害者スポーツの大会に出場して、何回か経験を積んで4年前、初めて日本代表に選ばれてアテネパラリンピックのマラソンに出場したの。感激したわ。小さい頃からの夢だったオリンピック——実際にはパラリンピックだけだね——に出場できたんですもの」

「それで、どうだったんですか？」

「…残念ながらまだまだ実力不足で、メダルには手が届かなかったけど。それで、4年後の北京では今度こそメダルを取ろう、どうせ取るなら金メダルを取ろう、って新しい目標ができたのよ。おかげで今度の北京にも代表に選ばれたんだけどね」

「それじゃあ、練習にも熱が入りますね」

「それはそうよ。コーチも『この4年の間にお前もかなり実力が上がった。これなら普段のお前の力を出し切ればメダルは間違いない』って言ってくれてるし。だから今から大会が始まるのを楽しみにしてるのよ。それに…」

「それに？」

「…実はね、ある子と約束しているのよ。北京では必ずメダルを取

る、って」

「ある子、って…？」

「…2、3ヶ月くらい前だったかしら。たまたま私が病院に行ったときに知り合った7歳の女の子がいるのよ」

「その女の子がどうかしたんですか？」

「…その子ね、ある病気にかかっていて、この春から入院しているんですって」

「病気に？」

「うん。私もその親御さんや担当医の先生にそれとなく聞いてみただけなのでよく分からないんだけど、その子の病気、っていうのが現在でも完全な治療法が確立されていない難病なんですって」

「そうなんですか…」

「それで担当医の先生は手術を勧めているらしいんだけど、なかなか親御さんもその子も手術の決心がつかないらしいんですって」

「…ふーん」

「それでね、私、その子と知り合ってから、何とか元気付けてあげようと思って、時々お見舞いに行っているんだけど、その子の笑顔をを見ると、とても病気だとは思えない明るい子でね。いつもその子を見て思うの。こんな小さい子が必死になって病気と戦っているんだから、私もがんばらなきゃ、って」

「…」

「それで、この間、その子のお見舞いに行ったときに約束したの。北京パラリンピックで必ずメダルを取るから、あなたも病気に負けないように頑張りなさい、って」

「そうだったんですか…」

蘭は少女の身の上話を聞いて、その少女に同情を感じていた。

「7歳、って言ったらコナン君と同じくらいだよ。そんな子が難病にかかっているなんて…」

蘭は自分の家にいる少年——江戸川コナンの顔を思い浮かべながらつぶやいた。もしコナンがその彼女の話に出てきた少女と同じよ

うにもし難病にかかっていたとしたら、果たして自分はどんな風に思うのだろうか？　そして自分はコナンに対しいろいことがしてあげられるだろうか？

「…あ、ごめんなさいね。なんだか嫌な話をしちゃって」

「いえ、いいんです。世の中にはそうやって難病と戦っている子供たちがいる、と言うのは私自身参考になったし、そういう励ましがあるからこそ、子供たちだって病氣と戦う勇気がわいてくると思いますよ」

「そうかもしれないわね」

そして藤田貴代が左腕にしてある時計を見た。

「…あ、いけない。そろそろ会社行く準備しなきゃ」

そう言うのと彼女はまた器用に両腕だけを使って車椅子に乗り込む。

「それじゃ蘭さん。とても楽しかったわ」

そして、車椅子で走り出そうとしたときだった。

「…あの、藤田さん」

蘭が呼び止めた。

「何かしら？」

「…あの、私もその話に出てきた女の子に会ってみたいんですけど、いいでしょうか？」

「別にそれはかまわないわよ。…そうねえ。それじゃ今度の土曜日はどうかしら？」

「ええ、いいですよ」

「それじゃあ待ち合わせしないかね。…じゃあ、土曜日の9時半にこの公園の入り口でどうかしら？」

「ええ、いいですよ」

「それじゃ、土曜日にね」

そしてその車椅子は蘭の元を走り去っていった。

（第2話に続く）

第1話（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等は「名探偵コナンノベルズ」のBBSの方をお願いします。

第2話

土曜日、米花公園の入り口。

蘭はここに来る途中、開店したばかりの花屋で買った、少女の見舞い用の花束を手に使っていた。

その傍らにはコナンが立っていた。

「ねえ、蘭ねーちゃん」

コナンが蘭に話しかける。

「なに？」

「その蘭ねーちゃんが言っていた女の人、って何時ごろに来るの？」

「うーん、9時半にここで待ち合わせ、って言ってたからねえ。そろそろ来るんじゃないかなあ」

蘭が左手にしてある腕時計を見ながら言う。

と、入り口の前に一台の車が停まった。

そして助手席側のウィンドウが開くと、

「蘭さん、お待ちせ」

藤田貴代が運転席から声をかけた。

「え？ 藤田さん、免許持ってたんですか？」

「ええ、これでも就職してすぐに取ったのよ。…ところで、その子誰？」

と、彼女はコナンを見て言った。

「あ、ウチで預かっているコナン君なんです。藤田さんの話をしたら、コナン君もその子に会ってみたい、って言うんですよ。コナン君も一緒に連れて行っていいですか？」

「それは別にかまわないわよ。とにかく、ここで立ち話もなんだから早く乗って」

「それじゃ失礼します」

そして蘭は助手席に、コナンは後部座席に座った。

二人がシートベルトを着用するのとはぼ同じくして車が発進する。

＊

「…コナン君、ちょっと狭いけど、ごめんなさいね」

藤田貴代が後部座席のコナンに言った。

そう、コナンの隣には折りたたまれた車椅子が置いてあったのだ。

「ん？ 大丈夫だよ」

「それならいいんだけど」

「…ところで藤田さん」

蘭が話しかけた。

「なに？」

「…藤田さん交通事故に遭って歩けなくなった、って言っていたのに何で運転免許を取ったんですか？」

「ああ、それね。やっぱり車椅子生活だとしても行動範囲が狭くなっちゃうのよ。だから少しでも行動範囲を広くしたかったのよ。それに…」

「それに？」

「たとえ歩けなくなっても努力すれば何だってできる、って言うことの自信をつけたかったの。車椅子マラソンを始めたのもそうだし、免許を取ったのもそう」

「ふーん、そうなんですか」

そんな会話を聞きながら、コナンは後部座席から運転席の藤田貴代を見る。

（…それにしてもこの車、随分工夫してあるんだな…）

そう、彼女が乗っている車はハンドルにノブが付いていて、右腕だけでハンドル操作ができるようになっており、運転席の左側、シフトレバーの下にもう一本レバーが付いていて、左腕でそのレバーを使ってアクセルやブレーキ、ウィンカーなどの操作をしているのだ。

「…どうしたの、コナン君？」

藤田貴代がさっきからじっと運転席を見ているコナンに気づいて

聞いた。

「ん？ この車面白いね。両手だけで運転できるんだもん。まるでラジコンカーみたいだね」

「…面白い事言うわね。確かに両腕だけで運転できる、って言うのはラジコンカーを動かすのに似ているかもしれないわね」

やがて車は病院の駐車場に到着した。

「ちょっと待っててね」

先に車を降りた蘭たちに言うと、藤田貴代は後部座席に置いてあった車椅子を車外に出すとそれを開き、乗っていた車から乗り移る。そして車椅子を動かそうとした時、

「あ、押してあげますよ」

そう言うと蘭はコナンに持っていた花束を渡し、車椅子の取っ手を持った。

「あ、悪いわね」

そして3人は正面玄関のスロープから病院の中に入っていった。

*

エレベーターである階に着くと、蘭は藤田貴代が乗っている車椅子を押し、コナンはその傍らで廊下を歩いていった。

やがて、

「あ、この病室よ」

「都築ちはる」と名札があった病室を藤田貴代が指差した。

（…おや？）

コナンはその名札をじつと見る。

（…都築ちはる、って名前どこかで聞いたことあるぞ…）と、

「コナン君、何してるの？」

蘭の声が聞こえた。

「う、うん。なんでもないよ」

そして3人は病室に入っていた。

病室に入ると、窓側の席にベッドに上半身を起こしている少女がいた。その傍らには一人の女性がいた。

「ちはるちゃん」

藤田貴代が話しかける。

「あ、お姉さん、いらっしやい」

ベッドの少女が挨拶をする。

「いつもすみません」

ベッドの傍らの女性が話しかけた。と、傍らに立っている蘭たちを見ると、

「……ところでそちらの方は？」

「あ、知り合いの毛利蘭さんと、江戸川コナン君です。ちはるちゃんのお見舞いに行きたい、っていうので今日は一緒に来たんです」

「……はじめまして。私、都築ちはるの母親で都築真弓と言います」

そういうとその女性は二人に挨拶をする。

「はい。これ、お見舞い」

そう言うコナンはちはるに花束を渡す。

「ありがとう」

「本当にすみませんね」

そう言う都築真弓はベッドの隣にあつた花瓶に水を入れるために病室を出て行った。

*

そして蘭とコナンは近くにあつた椅子を持ってくるとそれに座つて、藤田貴代や都築ちはると話を始めた。

「……ふーん。学校の先生が毎日お見舞いに来てくれているんだ」

藤田貴代が言う母親の真弓が、

「そうなんですよ。この子入学してすぐに入院してしまったでしょ？ 担任の先生も心配しお見舞いに来てくれているんですよ。その時に退院しても大丈夫なように、ってときどき勉強も教えてくれているんです」

「優しい先生ですね」

蘭が言う。すると、

「ほお、今日もお見舞いに来てもらっているんだね」
白衣を着た人物が病室に入ってきた。

「あ、先生」

都築真弓が言う。

「…先生、って？」

蘭が聞くと、

「あ、この子の主治医の先生なんですよ」

「はじめまして。中島といいます」

そう言つと中島医師は蘭たちに挨拶をする。

「あ、はじめまして」

蘭も挨拶を返す。それにあわせてコナンも軽く会釈をする。

「お母さん、ちょっとよろしいでしょうか？」

中島医師が都築真弓に話しかけた。

「何でしょうか？」

「ここではなんですから診察室のほうで。…ちはるちゃん。ちょっとお母さんを借りるね」

「はい」

それを見た藤田貴代が、

「…それじゃ、私たちはここらでお暇しましょうか」

「いえ、すぐ済みますから」

中島医師が言うが、

「いえ、こつちも随分と長居しちゃいましたし。それじゃちはるちゃん、また来るわね」

そして3人は病室を出て行った。

*

車の中。

「…本当にあの子、見てみると病気にかかっているなんて思えませんか」

蘭が藤田貴代に話しかける。

「そうね。私も最初はそう思ってたんだけど、実際にはあんな小さな子が病氣と戦ってるんですものね」

「…コナン君はどう思った？」

蘭は後部座席のコナンに話しかけた。

「…うん。確かにあんな子が病氣にかかっているなんて信じられないよ。一日も早く元気になって欲しいね」

*

やがて米花公園の前に車が止まり、蘭とコナンが車から降りた。

「…本当にすみませんでした」

そして二人は藤田貴代に挨拶をする。

「いえ、こちらこそ。それじゃ、またね」

そして走り去った車を見送った後、コナンと蘭は家路に付く。

「ねえ、蘭ねーちゃん」

コナンが話しかけてきた。

「…どうしたの？」

「病院に着いたときからずっと思っていたんだけど、都築ちはる、って名前どこかで聞いたことない？」

「どこかで、って言われても…、聞いたことあったかなあ」

「ほら、この間おじさんが見ていた新聞にそんな名前あった気がしたんだけど…」

それを聞いた蘭は、

「…そう言えば思い出した。確か手術に必要な血液が特殊な型の子だったんじゃない？」

「そうだよ、その名前聞いたときからどこかで聞いたことがあったんだけど、たぶんその女の子だよ」

「…確かこんな記事だったよね。確かちはるちゃん、って数十万人にひとりしかいない、と言う特別な血液型で、手術の際に普通の血液を使うと体が拒絶反応を起こす可能性があるから今、彼女と同じ

血液型を持っている人を探している、とかそんな記事だったわね」
「あのお姉さんが言っていたけど、あの子のお母さんが手術の決心がつかない、って言うのはもしかしたらあの子と同じ血液型の人が見つからないから、ってことがあるのかもしれないね」

「そうね。数十万人に一人しかいない、って言う同じ血液型の人が見つかるといいんだけど…」

「どうやら今回の件に関して蘭にとってもコナンにとってもいろいろと考えさせられる部分があったようだ。」

*

それから数日経った日のこと。

「…コナン君！」

蘭がコナンを呼んだ。

「何、蘭ねーちゃん？」

「この記事を見てよ」

そう言うつと蘭はコナンの目の前で新聞を広げ、ある記事を指差した。

そこには「ちはるちゃん 血液提供者見つかる」と言う見出しが書かれていた。

「ちはるちゃん、って…」

「そう、この間お見舞いに行ったあの女の子よ。やっぱりコナン君の言うとおりであったのね。…何でも彼女と同じ血液型の人が見つかったらしいのよ」

「それで？」

「うん。その話を聞いてお母さんも、彼女の手術に同意したらしいわ。ただ…」

「ただ？」

「その彼女と同じ血液型の人に住んでいるのは沖縄の石垣島、って言う話らしいのよ」

「石垣島？」

石垣島と言ったら沖縄本島よりさらに西にある島のはずである。

「それで、石垣島でその人の血液を採取して、東京まで血液を空輸することになったんだって。それが到着次第手術を行う、って言う話らしいのよ」

「ふーん。でも大変だね、石垣島から東京まで血液を空輸する、って言うのも」

「そうね。何でも石垣島から東京まで直通便がないから、って言うことで一旦那覇まで行ってそこで東京行きの飛行機に積んで、羽田に向かうことになったんだって。だから迅速な行動が求められるみたいよ。まあ、でもこれであの子の病気が快方に向かえばいいんだけど」

と、その時、部屋の電話の呼び出し音が鳴った。

「…はい、毛利ですが。…あ、藤田さん？」

どうやら藤田貴代のようだ。

（…そういえばこの間お見舞いに行った時、蘭とあの女の人がお互いの電話番号交換してたな。毛利小五郎の娘だと知って、あの人驚いてたな）

コナンはそう思った。

「…ええ、そうです。ちはるちゃん、よかったですね。これで病気がよくなるといいんですけれど…」

どうやら、例の少女のことが話題になっているようだ。

コナンはその会話を聞きながら何気なく新聞に目を落とす。と、

（…おや？）

例の記事が書かれている同じ紙面の隅にあつたある記事でコナンの目が止まった。

「病院からバン盗まれる」と言う記事だった。

記事によると昨日の朝早く、ある病院から一台の輸送用のバンが何者かによって盗まれた、と言う届けがあつた、と言うことだった。警察の調べによると、病院の事務所の鍵が壊され、バンの運転に使うキーも盗まれていた、と言うことから警察は病院内の事情に詳しいものの犯行と見て捜査を始めた、と言うことだった。

「…どうしたの、コナン君？」
蘭がコナンに聞く。

「ん？ な、なんでもないよ」

コナンは口では蘭にそう言ったが、

(…なんか気になるなあ…)

そう、心の中ではなんとなくこの事件が心に引っかかったのだ。

(…オレの思い過ごしだといいいんだが…)

*

そして数日が経ち、採取された輸血用の血液が東京にやってくる日のこと。

既に朝のうちに石垣島で血液は採取され、那覇空港に運ばれた血液はそこから飛行機で運ばれ、予定通り東京に到着する予定だ、と言うニュースがその日の各局のテレビで放送されていた。

羽田空港に1機の旅客機が到着し、中からジェラルミンのケースを持った二人の人物が降りてきた。

その二人を待っていたかのように二人の白衣を着た人物がやってきた。

「…お待ちしておりました」

白衣を着た人物の片方が言う。

「これが血液です」

そう言うつと、その沖縄から来た人物は白衣を着た男にケースを渡した。

「扱いには気をつけてくださいね」

「分かってますよ」

そう言うつと白衣の人物二人は足早にその場を立ち去っていく。

それから程なくのことだった。

一台のバンが羽田空港に止まると、中から二人の人物が出てきた。そして空港ロビーに入るが、

「……？」

何か周りの様子がおかしいか、辺りを見回していると、

「どうしました？」

空港職員が話しかけてきた。

「いえ、まだ来ていないんでしょうか？」

「まだ来ていない、といいますと？」

「いえ、今日沖縄から輸血用の血液が届けられるはずなんですが」

「え？ 先ほど受け取りに来た方がおられまして、その人に渡したようですけど」

「なんですって？ ……その血液は我々が受け取ることになっているんですよ」

「本当ですか？」

「とにかく、誰かを呼んでください！」

そしてにわかに羽田空港のロビーはあわただしくなった。

すぐさまその連絡は東京警視庁に行き、捜査二課の中森銀三警部が数名の刑事とともに羽田空港に駆けつけ、事務室の片隅を借りての事情聴取が始まった。

「……つまりあなた方が本来受け取るはずだった血液を、何者かが血液を受け取りに来た医師団だと偽って、輸血に使う血液と受け取ってどこかへ立ち去った、と言うことになりますな」

中森警部が医師の一人に聞く。

「はい。あの血液はちはるちゃんの手術に使うためにどうしても必要な血液なんですよ」

「……そういえば新聞に書いてありましたな。確か数十万人にひとりしかない、という特殊な血液型なんですよ？」

「ええ。国内に同じ血液型の人物がいたこと自体が奇跡に近いんですよ」

「……となると、その血液が今日、羽田に届けられることは誰もが知っていたことだから、やろうと思えば犯行は可能と言うことになる。

…となると、その受け取りに来た人物が怪しいということになりま
すな。」

中森警部が言う。

「はい。おそらくそうではないか、と」

「そう言えばこの間、病院から輸送用のバンが盗まれた、と言う事
件があったが、それとも今回の事件は何か関係があるのか？ …と
ころで、その受け取りに来た人物の人相とかは分かりますか？」

中森警部は空港職員に聞いた。

「いえ、ちらつと見ただけなので…。確か二人組だったということ
までは覚えてはいるんですが…」

「…となると、アイツの仕業ではない、と言うことが…」

「アイツ、って誰ですか？」

空港職員が聞き返す。

「あ、いや。それはこつちの話で」

「…そうだ、沖縄から血液を届けに来た医師団がその受け取りに来
た人物に会っていますから、彼らに聞けば何か分かるかもしれませ
んね」

「その、沖縄から来た医師団が那覇空港に到着するのは？」

職員は事務所内の時計を見ると、

「そうですね。6時過ぎになると思いますが」

そして中森警部も時計を見る。

「…となると、まだ時間はあるな。わかりました、今から沖縄県警
に事情を話して協力を要請しておきますよ。電話をお借りします」

そして中森警部は事務所内の電話の受話器を取った。

（第3話に続く）

第2話（後書き）

（ちょっと一言）

この話に出てくる藤田貴代が運転してる車、と言っのは「福祉車両」といわれている車です。

私自身、トヨタ自動車のホームページ（私の今乗っている車がトヨタなので）で福祉車両について調べたので、この描写で間違っていないとは思うのですが…。

この作品に対する感想等は「名探偵コナンノベルズ」のBBSの方をお願いします。

第3話

蘭たちがその事件を知ったのは、その日の夜、夕食を終えた後に小五郎が見ていたテレビのニュースだった。

「…蘭、ちょっと来い！」

台所で後片付けをしていた蘭に小五郎が叫んだ。

「どうしたの、お父さん？」

そう言いながら蘭が小五郎のいる部屋にやってきた。

その部屋では小五郎とコナンがTVの画面を凝視していた。

「…確か都築ちはる、ってこの間おまえたちが病院に見舞いに行つた女の子だよな？」

「そうだけど、それがどうしたの？」

「今、その子のニュースをやっているぞ！」

「本当？」

そして蘭はテレビの画面を見る。

テレビではニュースキャスターが「石垣島から空輸された血液が何者かの手によって盗まれた」というニュースをやっていた。

「…なんですってえ？」

ニュースを聞いた蘭は思わず目を丸くした。

「…これじゃちはるちゃん、手術ができないじゃない」

「らしいな。病院も今日の手術は延期したらしい。…しかし血液を盗むたあ、いったい犯人も何が目的なんだ？」

「…そうだよな、誘拐事件と違って身代金を取るわけにもいかないし…」

「…いや、それはわからねえぞ」

「わからない、って…」

「確かそのちはる、って子はおまえの話だと数十万人に一人しかない、と言う特殊な血液型だ、って言うんだろ？ そんな珍しい血

液型の血液だとしたら金目当てに盗み出すヤツだっているだろう」

（…意外とおっちゃんの考えが当たっているかも知れねえな。オレがもし犯人だとしたら病院にでも金を要求するぜ）

コナンも二人の会話を聞きながらそう思った。

その時、傍らの電話の呼び出し音が鳴った。

蘭が電話を取る。

「はい、毛利です。あ、目暮警部。…はい、はい。ええ、ええ。わかりました。すぐに伺います」

そして蘭は電話を切った。

「…目暮警部はなんて言ってたんだ？」

「詳しい話を聞きたいから、って今から警視庁にきてくれ、って」

「…そうか、じゃあオレも一緒に行く」

「あ、ボクも」

そして3人はタクシーを拾うと、警視庁へと向かった。

*

警視庁。

「おつ、蘭君にコナン君。すまん、わざわざ来てもらってやってきた小五郎たちに目暮警部が挨拶をする。」

「それで、血液が盗まれた、って言うのは？」

「うむ、羽田から戻ってきた中森警部から聞いたんじゃないか…」

そして目暮警部は羽田空港での出来事を蘭たちに話した。

「…となるとその沖縄からの医師団がやってきた際に渡した相手、というのが臭いですな」

小五郎が言うと、

「ウム。そのことは今、東京空港警察所に頼んで周辺の聞き込み捜査をやっているところだよ」

「そうですか」

「たった、事件が発生してつい先ほどまで、そのちはるちゃんの母

親を呼んで話を聞いてみたんだが、彼女も犯人に心当たりはないそうだ」

「そうですね。やっと手術ができる、って喜んでいた矢先だったのに…」

「で、その、彼女の母親と話をしているときに君の名前が出てきた。そこで君を呼んで話を聞いてみようと思ったわけだが…」

「でも、あたしはそのちはるちゃんとはこの間のお見舞いに行った際に初めてあつたんです。ですから彼女の周りの人物についてよく知らないし、ましてや犯人の心当たりなんて…」

「…まあそうかもしれない。いや、実はもうひとつ、気になることがあつてな」

「気になること？」

「その、血液が沖縄から空輸される数日前にある病院からバンが盗まれる、と言う事件があつてな」

「バンが？」

「ああ、もしかしたら今回の事件となんか関係があるのではないか、と思って今s gひらべているところだよ」

「ところで、その沖縄の医師団からは何か連絡があつたんですか？」

「そのことは中森警部が沖縄県警に協力を依頼したそうだ。先ほど連絡があつて沖縄に戻った医師団を呼んで県警のほうで事情聴取をしているらしいから、今日中にはその内容が警視庁のほうにも来るだろう」

と、そのときだった。

「…？」

蘭の持っている携帯電話が着メロを鳴らした。

「ちよつとごめんなさい」

そう言つと蘭は携帯電話を取り出した。

「もしもし。…あ、藤田さん」

どうやら電話の相手は藤田貴代のようである。

「…藤田？」

目暮警部が言うと小五郎が、

「蘭が知り合った、って言う女性なんですよ。何でも都築ちはる、
と言う子を知ったのも彼女と一緒に病院にお見舞いに行ったことか
らしいんですわ」

「…ふうん」

「はい、はい。…そうですね、こんなことになるなんて。ええ、え
え…」

どうやら今回の事件に関して蘭に電話を掛けてきたらしい。

「…はい、はい、そうですね」

と、蘭の話が一段落ついた所で、

「蘭くん、ちょっと貸してくれんか？」

目暮警部が言う。

「あ、はい。ちょっと待ってくださいね。…どうぞ」

そして目暮警部は、蘭が差し出した携帯電話を受け取ると、

「あー、もしもし。警視庁の目暮と申します。…はい、はい。…あ
ー、そうですか。いや、実はその件に関してちょっとご協力をお願
いしたいんですがね。…はい、それではお待ちしております」

そして携帯電話を切ると蘭にそれを渡した。

「…いったいどうしたんですか？」

「いや、ついでだからな。彼女にも話を聞こうと思ったんだよ。何
でも彼女の紹介でその女の子と知り合ったそうじゃないか」

「ええ」

「だから彼女から話を聞いたら何かわかるかもしれないからな」

それからしばらく経って、捜査一課の部屋に警官の押す車椅子に
乗った藤田貴代が入ってきた。

「…目暮と言う方から電話があつたんですが」

藤田貴代がそう言うと、

「ああ、あなたが藤田さんですか」

そう言いながら目暮警部は近づくと、車椅子に乗った彼女を見て、
「…ああ、すみませんでしたな。足が不自由だったとは知らなかった
ので。ここに来るまで大変だったでしょう？」

「いえ、慣れてますし、ちょうど下にいたお巡りさんが手伝ってく
れたので。…それで私に何の用でしょうか？」

「いえ、ちよつとお話を伺いたくて。よろしいですね？」
「ええ」

そして目暮警部たちは別室へと向かった。

*

「いや、どうもありがとうございました」

そう言いながら目暮警部が藤田貴代とともに出てきた。

「…どうでした？」

蘭が聞くと目暮警部は、

「うん。彼女も犯人の心当たりがない、と言っておったよ」

「そうですか…」

「まあとにかく、君たちの話は二課のほうにも伝えておくよ。また
何かあったら連絡してくれんか？」

「ええ、それはいいですけど」

「それで、その沖縄の医師団の件はどうなりますか？」

小五郎が聞くと、

「ああ。連絡が入ったら君たちにも知らせるよ。ただもう少しか
かるかもしれんな」

「わかりました」

「…あの、警部さん。そろそろ私たちは帰ってよろしいでしょうか
？」

藤田貴代が聞くと、

「あ、それは構いませんよ。どうもご協力ありがとうございました。
何か気がついたことがあったら遠慮なく警視庁のほうまで連絡をく
ださい」

「わかりました。…それじゃ蘭さん、送ってあげるわ」

「え、いいんですか？」

「同じ米花町に住んでるんですもの。どうせ帰り道は一緒だし」
「本当にすみません」

*

車が毛利探偵事務所の前に着き、中から3人が降りてきた。

「いや、送っていただいて本当にすみませんなあ」

小五郎が運転席に向かって何度もぺこぺこしている。

「いえ、いいですよ。このくらい」

「…それじゃ何かあったら連絡をいただけませんか？」

「わかりました。それじゃ」

そして3人は車を見送る。

「…さ、行こうか」

蘭がコナンに話しかける。

「うん」

そして3人が探偵事務所に入り、ソファに座ると蘭が。

「…なんか残念そうな顔してたね、藤田さん」

「…そうだろうな。話を聞いてみたけど、なんかその女の子と知り合ってから、休みがあると見舞いに行っていた、って言うんだろ？
そしたら自然と情だって移ってくるさ」

「そうだよな。あたしだってコナン君がもし同じような病気にかかっている、って聞いたらそれこそ毎日のようにお見舞いに行くわよ」

「…それにしても、数十万人に一人、と言う特殊な血液型が、あんな形で犯罪を引き起こしてしまうとはな」

「そうね。犯人もそれを知って血液を盗んだんだろうね」

「…とにかくなんか手がかりがつかめればいいんだが…」

そう言いながら小五郎が事務所にあるカレンダーを見る。

「…そうか。もうすぐ北京オリンピックが始まるから、その、彼女が出る、っていうパラリンピックも後1ヶ月くらいで始まるんだな。彼女には何とかすつきりとした気持ちで北京に行ってほしいもんだ」

が……」

そう、北京五輪が8月8日（サッカーはその2日前の8月6日から始まるが）から24日に開催された後に、9月6日から17日までの12日間、同じ北京でパラリンピックが開かれるのだ。聞いた話だと藤田貴代は8月の終わりには北京に向かって現地で練習を始める、と言う話だった。

（……そうだな。何とか早く見つかって、あの、ちはる、って子の手術を見届けたうえで、彼女も北京に行きたいだろうな）

コナンも思った。

*

その翌日、朝早くのことだった。

毛利家の電話の呼び出し音が鳴り、すぐそばにいた小五郎が電話を取った。

「はい、毛利。……あ、目暮警部でしたか」

どうやら電話の相手は目暮警部のようだ。

「……はい、はい。……何ですって？ ……わかりました。とにかく今からそちらに伺います」

そして小五郎は電話を切った。

「……どうしたの、お父さん？」

蘭が聞く。

「昨日の夜遅く、沖縄県警から警視庁に連絡があつて、例の血液を盗んだヤツらのことに関しての証言がとれたらしい。それと……」

「それと？」

「ついさっき、あの、ちはると言う子の母親から警視庁に連絡があつて、その、母親の家に金銭を要求する脅迫状が届けられたらしい」「脅迫状ですって？」

「ああ。それで、母親から詳しい事情を聞くために、今から警視庁に来てもらうらしい。それで目暮警部がオレたちにそのことについて話をしたい、ということ、今から来てほしい、と言うことだ」「わかったわ。じゃ、今から支度するから」

「あ、そうだ。ついでにあの、藤田って女性に連絡して、一緒に警視庁に来てもらえるかどうか聞いておけ」

「わかったわ。…コナン君、早く支度して」

「うん」

そして小五郎はタクシーを呼ぶために電話のダイヤルをプッシュした。

*

そして警視庁の玄関前で藤田貴代と落ち合ったコナンたち4人は警視庁捜査一課の部屋に入った。

その中には目暮警部と都築ちはるの母親である都築真弓、そして中森警部の3人がいた。

「あ、これはお母さん」

藤田貴代が言くと、

「すみません、ご心配をおかけして」

そう言つと都築真弓が深々と頭を下げる。

「いえいえ、お母さん。我々に頭を下げられても…。ところで目暮警部。その脅迫状の内容とは？」

小五郎が言つと、

「うん、現物は今、科研に回しているのでコピーで申し訳ないが、これと同じものが、今朝ポストの中に放り込まれていたそうだ」

そして小五郎たちの目の前に一枚の紙を差し出す。

「…3000万円ですと？」

文面を呼んだ小五郎が思わず大声を上げた。

そう、その脅迫状には血液を返してほしかったら3000万円を支払え、という内容のパソコンのワープロソフトで打たれたような脅迫状が書かれてあったのだ。

「…この内容の文面が書かれた紙が何も書かれていない封筒に入つて今朝、ポストの中に入っていた、と言うからおそらく家がどこにあるか調べてポストに入れておいたんだらう。…これについても今、周辺の聞き込み捜査を行つておるよ」

「それで、その沖縄の医師団の話と言うのは？」

「うん、それがだな……」

と、そのとき、捜査一課の電話の呼び出し音が鳴り、目暮警部が電話を取る。

「目暮だが。…うん。そうか、わかった、ありがとう」

そして電話を切ると、

「今科研から連絡があった。やはり指紋は検出されなかったそうだが印刷された文面も一般的なパソコンの文書作成ソフトで作られたものでこれと言った特徴はなかったそうだが」

「そうですか……」

「…それで、その沖縄の医師団の話だが、ほんの1、2分程度あっただけだったので詳しい人相とかはわからないが、なんか人目をやたらと気にしていたようで、血液を受け取るとさっさと空港を出て行ってしまった、と言う話だったようだ」

「それじゃあ……」

「おそろくな。犯人としては他人に目撃されるのがいやだったのだから。とにかく今は容疑者の手がかりを見つけるのが先決だからな君たちも何か気になることがあったら連絡してくれたまえ」

「わかりました」

（第4話に続く）

第3話（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等は「名探偵コナンノベルズ」のBBSの方をお願いします。

第4話

「すみません、中森警部」

そのとき、捜査一課のドアが開き一人の刑事が顔を出した。

その刑事は捜査二課の中森警部の部下だった、

「どうした？」

「いえ、この方が中森警部に話したい、というので、捜査一課の方にいる、と案内したのですが…」

そういう刑事の傍らには一人の男性が立っていた。

「あ、確かちはるちゃんの…」

その姿を見た蘭が言う。そう、その男は都築ちはるの主治医の中島医師だった。

「あ、確か先日お見舞いに来られた…」

中島医師も蘭に気がついたようだ。

「失礼ですが、どちらさまでですか？」

目暮警部が聞くと、

「あ、申し遅れました。私、都築ちはるちゃんの主治医で中島と申します」

中島医師がそう言う中森警部が、

「…ああ、あなたがあのちはるちゃんの…。いろいろと話は聞いておりますよ。それで先生。今日は何の用事で？」

「いえ、血液が盗まれた、と聞いて、いったいどうなっているのかお話を伺いに来たのですが…」

「我々としても今は全力で捜査している、としか申し上げようがありません」

「そうですか…」

「ところで中島先生、実は先ほどこのような内容の手紙がちはるちゃんのお母さんの家に届けられたそうです」

そう言う中森警部は中島医師に例の脅迫状のコピーを見せる。

それを見た中島医師は、

「…よかった」

と思わずつぶやいてしまった。

「…よかった、ってどういうことですか？」

目暮警部がやや強い調子で聞くと、

「あ、いえ、その、血液がまだ大丈夫だった、ということ」

「大丈夫？」

「はい。これによると犯人は血液を低温で保存しているらしいんですよ」

「低温で保存している、とはどういうことですか？ ……もしかして、手術に何か不具合があるとでも？」

「いえ、その…。我々としてもできる限り早く手術をやりたいんですが」

「…そんなにちはるちゃんの具合が悪いんですか？」

「いえ、彼女の容態は安定しているんですが、時期が時期だけに血液の問題がありましたね」

「血液？」

「はい。ご存知かと思いますが、彼女の血液型は数十万人に一人と言われている特殊な血液型ですからね。この暑い中、何時間も血液を常温のままそのままにしておくとも腐敗や細菌の増殖が始まってやがては使えなくなってしまう可能性があるんですよ」

「…ああ、確かにその可能性はありますね」

「そんなことになってしまうと、また彼女の血液型に会う人物を探さなければならぬんですよ」

「ああ、そうでしたな。確か献血をすると一定期間——確か最低でも4週間でしたか——は同じ人物から血液を取ることができないんですよ」

「ええ、そうなんです。ですが、この脅迫状によると犯人は血液を低温で保存している、とのことですから、少々手術が遅れても何とかなるのでその辺はよかったのですが、ただそうは言ってもあまり

長い時間そのままにしておくわけにもいかないので、何とか今日中には手術をしたいのですよ。…ですから私のほうから何とか早く血液を見つけてほしいのですが…」

「それはわかっております。ですから我々としても何とか取り戻したい、と思っではいるのですが…」

「…でも三千万円なんてとても用意できるお金では…」
都築真弓が言う。

「…大丈夫ですよ、奥さん。我々としてもできるだけ早く犯人を検挙して、血液を取り戻すつもりです」

中森警部が言う。

「宜しく願います」

その言葉を聞いて都築真弓が頭を下げる。

「私からも願います」

中島医師が言うと、

「とにかく先生はすぐにでも手術ができるように手はずを整えておいてください」

「…わかりました。…それじゃお母さん、ちはるちゃんのところに行きましょうか」

「はい」

そして中島医師と都築真弓の二人は捜査二課の部屋を出た。

「…それで、その血液を盗んだ人物についてはどうなっとるのでありますか？」

小五郎が目暮警部に聞いた。

「ああ、それか。今沖縄県警のほうで例の医師団の証言を元に、血液を渡した人物の似顔絵とモニタージユを作っておるところじゃよ。完成したいこちらに送ってくる手はずは整えておるよ」

「そうですか」

「…それにしても、これって計画的な犯行だったのかしら…」
蘭がいう。

「計画的、って、どういうことじゃ？」

目暮警部が聞く。

「いえ、羽田空港で本来血液を受け取るはずだった医師団より先に血液を受け取ってそのまま逃走する、なんていうのは前もって計画していないとできないと思うんですね。だってちはるちゃんの血液型が特殊な血液型だというのは、数日前の新聞で石垣島で同じ血液型の人が見つかった、と言う報道があって誰もが知っていることですよね？」

「…確かにそうじゃな。そうなるとその血液を盗もう、とよこしまなことを考えるヤツが出てきてもおかしくはないな」

「…それに、ある病院のバンが盗まれた、と言う事件があつたですよ？」

コナンが言う。

「ああ、確かにあつたな。それがどうかしたのかね？」

「どうもその事件と今回の血液が盗まれた事件が関係あるように思えるんだよね」

「…うん、確かにそれも考えられるな。となると犯人は最初から——金が目的だったのかどうかはまだわからんが——血液を盗むつもりでその、病院からバンを盗んだ、とも考えられるな」

「…とにかく、沖縄県警から何らかの連絡がないと、我々としても何のしようもないですな。…まあ、とにかく今回の事件は我々二課に任せていただけませんかな？」

中森警部がそう言う。目暮警部は、

「もちろんそのつもりじゃよ。ただし、蘭さんやちはるちゃんのお母さんにはちゃんと経過の報告はしてくれらるんだろうな？ ある意味では彼女たちも今回の事件の関係者じゃからな」

「…それはわかっていますよ。それでは、これから今後の捜査方針を話し合いますので」

そう言う。中森警部は捜査一課の部屋を出て行った。

「…大丈夫かしら」

中森警部の出て行ったドアを見て蘭がつぶやいた。

「大丈夫、って、どうしたの、蘭ねーちゃん？」

コナンが聞く。

「ん？ いや、その、犯人が早く捕まってほしいし、血液が無事に見つかってほしいし、それより何よりちはるちゃんのが心配だし…。いろいろな意味で大丈夫かな、って」

（…ひよっとしたら中森警部が事件を担当するから大丈夫が、って思ったんじゃないの？）

コナンは思った。何せ中森警部といったら怪盗キッドが事件に絡むといつもヤツに出し抜かれているのだから。

そんなことを考えていると目暮警部が、

「…それじゃ、我々もこれからちよつとやることがあるからの。君たちも一旦戻りたまえ」

「戻る、って…」

「大丈夫。なにか動きがあったら君たちにも連絡するよ」

そしてコナンたちは一旦それぞれの家に戻ることにし、捜査一課の部屋を出ようとしたときだった。

「…藤田さん」

目暮警部が藤田貴代を呼び止めた。

「何でしょうか？」

「蘭くんから聞きましたが、来月北京で開催されるパラリンピックにあなたも出場するんですって？」

「ええ。女子の車椅子マラソンに」

「…すみませんなあ。大会も近いというのにお手間を取らせて。練習する時間もないでしょう？」

「いえ、そもそもちかはるちゃんを蘭さんに紹介したのは私ですし、事件が解決しないうちは、私も安心して練習に打ち込めませんから」
「そうですか。いや、本当にすみませんなあ」

*

その日の昼過ぎのことだった。

捜査二課の中森警部の下に沖縄県警から送られた人物の似顔絵とモニタージュ写真が届けられた。

中森警部は送られてきた似顔絵とモニタージュ写真を見ると、

「…こいつらがその、怪しい男たちか…」

そう、似顔絵やモニタージュ写真には二人の男が写っていたのだった。

「…よし、このコピーをとってから、病院の周辺でこの顔に似た男たちを見なかったのか聞き込み捜査だ。それから羽田空港の警察署にもこのコピーを送って空港周辺でこの人物に似た男たちを見かけなかったか聞き込み捜査を依頼しろ」

そう部下の刑事たちに命じた。

そして彼らは捜査二課の部屋を出て行った。

「…というわけだ。そのコピーを一枚一課の方にも廻してもらったのがこれなんだが…」

目暮警部から連絡を受けたコナンたちは再び警視庁に来ると、目暮警部から事情を聞き、その、沖縄県警のほうから回ってきた、と言うモニタージュや似顔絵のコピーを見せてもらった。

「…何か見覚えはないかね？」

「いえ、ちよつと心当たりは…」

蘭が言うと目暮警部は、

「…あなたはどうですか？」

蘭から連絡を受けて、彼らと一緒に警視庁に来た藤田貴代にも同じ事を聞く。

「…いえ、私も心当たりはないです」

そして目暮警部にコピーを渡した。

「そうか…」

「それで、この人物に対する何か有力な手がかりがあったんですか？」

蘭が聞く。

「…いや、今のところこれといった情報は入っていないようじゃが、二課のほうで聞き込みを続けているそうだし、羽田空港の警察署のほうでも聞き込みを続けているらしい」

「…そうですか」

「まあ、とにかく、今は一刻も早く情報が入ってくるといいんだが…」

と、そんなときだった。

捜査一課の電話の呼び出し音が鳴った。

「ああ、ワシが出る」

そう言つと目暮警部は手近にあった電話を取る。

「…もしもし、目暮だが。…そうか、わかった。ありがとう」

そう言つと目暮警部は電話を切った。

「何かわかつたんですか？」

小五郎が目暮警部に聞く。

「…今捜査二課から連絡があつた。事件が起こる数日前に例のバンが盗まれた病院の周辺で例の似顔絵に似た男たちらしき人物を見かけた、と言つ情報が入つたそうだ」

「…となると…」

「ああ、おそらく下見に来ていたんだろ。そうなると思つたら、その血液を盗んだ可能性が強いと思つが…」

それからまたしばらくしてのことだった。

捜査一課にまた電話が入ってきた。

「目暮だが。…なに？ うん、うん。そうか、わかった。中森警部にありがとうと伝えておいてくれ」

そういうと目暮警部は電話を切る。

「…何があつたんですか？」

蘭が聞く。

「ああ。さっきの話の続きじゃよ。どうやら犯人の目星がついたらしい」

「目星、といいますと？」

小五郎が聞くと目暮警部は、

「……どうやら目撃証言などから、今回の血液を盗んだ連中はある暴力団の構成員らしい」

「暴力団員ですって？」

「ああ。一応のために組織犯罪対策部（マル暴）のほうにもコピーをまわして情報提供を頼んだところ、ある暴力団によく似た男がいる、と言う情報があつてな。今確認を取っておるところじゃよ」

「でも……」

「君たちの言いたいことはわかつておるよ。ただ、毛利君はもともと刑事だったんだからわかるじやろうが、最近の暴力団員と言うのはちよつと目には普通の一般市民と区別がつかない構成員と言うのも多くてな。そういうった連中が医者に化けて血液を奪ったとしてもなんら不思議ではないのだよ」

「……そういえばそうでしたな。一見インテリ風に見える男が実は暴力団の構成員で、マル暴の刑事と並んでみるとどっちが暴力団員でどっちが刑事かわからなかったこともよくありましたな」

「それで今、対策部の協力を得て、その男たちの写真を持ってこれから聞き込みに当たる、と言う話じゃった。例の沖縄の医師団のほうにも沖縄県警を通じて話を聞いてみる、と言うことじゃよ」

「そうですか……」

「まあ、とにかく何か動きがあつたらこちらから連絡するから、君たちはもう戻りたまえ」

*

目暮警部から再び連絡があつたのは夕方4時を過ぎた頃だった。自宅の電話の呼び出し音となり、小五郎が電話を取る。

「もしもし。あ、目暮警部殿。……はい、はい。そうですか。わかりました。いえいえこちらこそたびたびお邪魔して。それでは今から向かいます」

そして小五郎が電話を切った。

「どうしたの、お父さん？」

「…今、目暮警部から連絡があつて、その血液を盗んだ男たちによく似た人物を見かけた、と言う情報があつたらしい」

「本当？」

「ああ、沖縄県警からも連絡があつて、その、医師団があつた男ともよく似ていた、ということだ。それで今、捜査二課の連中が事情聴取のためにその男たちがいる暴力団の事務所に向かっているらしい」

「本当？」

「ああ、それでちょっと話が聞きたい、ということなんで今から警視庁に来てくれ、ということだ。行くぞ」

（第5話に続く）

第4話（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等は「名探偵コナンノベルズ」のBBSの方をお願いします。

第5話

警視庁。

小五郎たちが捜査一課のドアを開けると、藤田貴代の姿があった。

「あ、藤田さん」

「あ、蘭さん」

「藤田さんも目暮警部に呼ばれたんですか？」

「ええ、そうなのよ。それで…」

と、言いかけた時、

「ああ、君たち待たせたな」

と目暮警部が現れた。

「それで、話とはなんでありますか？」

小五郎が聞く。

「うん。二課のほうから連絡があつて事情聴取のために暴力団事務所に行った、と言うのは話したな。それがこの男たちなんだが…」

と目暮警部が2枚の写真を取り出した。

「この男たちに見覚えはないか？」

そして写真を覗く4人。

「いえ、別に…」

「そうか。いや、どうも羽田空港や沖縄の医師団の話によると、彼らが血液を奪った犯人

なのではないか、と言うことなんだよ」

「そうですか…」

「それに聞き込みの結果だと何やら気になる行動を取っていたそうなんだよ」

「気になる行動と言いますと？」

「うん。何やら事件が起こる数日前から熱心に新聞を読んだり、バ
ンが盗まれたと言う病

院周辺やと言う証言が取れたらしい」

それから程なくして、捜査一課の電話が鳴った。

「…もしもし、目暮だが」

目暮警部が電話を取る。

「…そうか、うん、うん。わかった、ありがとう」

そう言う目暮警部は電話を切った。

「今、二課のほうから連絡があった。ちょうど写真の二人が米花町の商店街にある貸事務所

所周辺にいたところを聞き込み中の刑事がを見つけ、任意同行を求めたそうだ」

「貸事務所ですと？」

「ああ。最近の暴力団員はダミーの会社もいくつか持っていて、その事務所を借りる名目で事務所を借りている、と言う話だからな」

「しかし、暴力団員に貸す事務所なんて…」

「いや、最近の暴力団員は見た目では一般人と変わらないのも多いと言う話だからな。そ

いつらの顔を見て誰が暴力団員だと思うかね？」

「…まあ、確かにそれはそうですが…」

「それで何人かは取調べのためにこっちに帰ってくるが引き続き、事務所内の家宅搜索を

続けるらしい。何かわかったら連絡をすと言っておったよ」

それから十数分経ち、再び捜査一課の電話が鳴った。

「はい、目暮だが。…なんじゃと、それは本当なのか？…わかった。引き続き宜しく頼む」

そして目暮警部は電話を切る。

「いったいどうしたのでありますか？」

小五郎が聞く。

「今、二課と対策部が合同で事務所のほうを家宅搜索したんだが、血液が見つからなかったそうだな」

「なんですと？」

「それはとにかく、その任意同行を求めた暴力団員がやってきてからどこに隠したのか聞いてみるそうだが」

「……しかし、もし血液が見つからなかったら」

「ああ、その、ちはるちゃんの手術が始まらない、と言うことになるな」

(……待てよ、そう言えば……)

と、それを聞いたコナンはあることに気が付いた。

(もしかしたら、血液はあそこに……)

そして、あつという間に捜査一課の部屋を飛び出していた。

「コナン君、どこ行くの？」

蘭の声が背中中で聞こえたが、コナンは振り返らずに走り出した。

*

警視庁を出たコナンは一旦事務所に戻ると、太陽電池付きのスケートボードを小脇に抱え、表に出る。

「……よし、行くぞ！」

そしてコナンはスケートボードに飛び乗った。

そしてスケートボードは走り出した。

米花長の商店街の一角。

コナンはスケートボードをその中にあるビルの前に停めた。

「確かここだったよな。この間まで『貸事務所 テナント募集中』の紙がはってあったの」

は」

コナンが目の前に建っているビルを見てつぶやく。

「なんか変だと思ったんだよな。1年近く借り主が現れなかったのに、最近になって借り

主が出てきたんだからな……」

そしてコナンは中に入ると階段を上っていった。

その事務所の前には急ごしらえで作ったのであろう、事務所の名前をパソコンかプリン

トした髪が貼ってあるだけだった。

(……全く。自分から怪しい、って言っているようなもんだぜ)

そしてコナンがドアノブをひねると何の抵抗もなくドアが開いた。

「あ、開いた……」

おそらく、ちょっと近くに行くつもりで事務所を空けていたのだろう。

そしてコナンは中に入った。

中には応接セットと、スチール製の机があるだけの殺風景な部屋だった。

そしてコナンは辺りを見回す。

と、部屋の一角に冷蔵庫が置いてあった。

「……なんでこんなところに？」

コナンは不審に思いながらも冷蔵庫の扉を開けたときだった。

「あつた！」

思わずコナンは叫んだ。

そう、冷蔵庫の中に血液の入ったパックがあったのだ。

冷凍庫の中には保冷材もあった。

そしてコナンは辺りを見回すと、スチール製の本棚が近くにある。その扉を開けると中にジュラルミンの赤十字マークが付いたケースがあった。

「…もしかして、これが血液の入っていたケースじゃ…」

コナンはケースの中に血液のパックと保冷材と共にしまう。

「…とにかく、これを病院に届けなきゃ」

そして再び外に出るとケースを抱え、再びスケートボードに乗って走り出した。

*

それからどのくらい経っただろうか、不意に歩道のと真ん中でスケートボードのスピードが遅くなりだした。

「どうしたんだ？ まさか電池切れか？」

確かこのスケートボードはフル充電で30分程度しか走れないが、その電池が切れようとしているのだろうか。

そしてコナンは辺りを見回す。

「…やばい！」

そう、既に夕日が西に沈もうとしていた。これでは充電してもすぐになくなってしまっ
だろう。

「…まだ病院までだいぶあるのに…、どうすればいいんだ」

そのとき、コナンの傍らに一台の車が停まった。

「コナン君！」

ウィンドウが開くと藤田貴代が顔を出した。

「藤田さん！」

「こんなところにいたのね。探したんだから」

「ごめんなさい。でもちゃんと血液は見つけたよ！」

そう言つとコナンは血液に入ったケースを見せる。

「いったいどこで見つけたの？」

「それは後で話すよ」

「わかったわ、とにかく乗って！ 急いで病院に届けましょう」

「うん」

そういつとコナンが助手席に乗り込むと同時に車が走り出した。

藤田貴代の乗る車は制限速度をかなりオーバーして走っていた。
と、そのときだった。後ろからサイレンの音が聞こえてきた。

コナンは何かと後ろを振り向く。

「白バイが追ってきているよ！」

「何ですって？」

「前の車、停まりなさい！」

白バイの警官の声に藤田貴代が車を停める。

「…何やってんですか、スピード違反ですよ」

白バイの警官が車に近づくと運転席の藤田貴代に言う。

「それはわかってんです。でも、こっちも大事な用があつて…」

「大事な用って言つてもねえ…。ん？」

そういつと白バイの警官がコナンの持っていた赤十字のマークが
付いたケースに気がつ

いた。

「…なんですか、それは？」

「いえ、その、血液なんですよ」

「…もしかしてそれって、石垣島から送られてきた血液じゃ？」

事情に気がついたか、白バイの警官が言う。

「ええ、そうなんです。だからこれを病院に送り届けに行く途中だ
つたんです」

「…そうか、そういうことだったのか。わかりました。それじゃ、
先導しますので後るか

ら付いてきてください！」

白バイの警官がそういつと二人の顔がほころぶ。

「ありがとうございます！」

そして白バイに乗った警官が走り出すと、二人を乗せた車も後ろ
から走り出した。

＊

病院の正面玄関。

「…コナン君、いったいどこ言っただろう…」

蘭が辺りを見回しながらつぶやく。

「そう言えばその藤田、って人からの連絡はまだないのか？」

小五郎が言う。

「…うん。『コナン君を探しに行く』と言って別れたきり、連絡がなくて…。仕方ないからあたしは病院に戻ってきたんだけれど…」

「…まったく、アイツと来たらときどきどこかにいなくなるんだからな」

と、そのときだった。

「…おい、ありやなんだ？」

小五郎の声に蘭がその方向を向くと、1台の白バイに先導された自動車が病院の前にやってきた。

そして蘭たちの前に停まると、

「蘭さん！」

ウィンドウが開き、藤田貴代が顔を出す。

「藤田さん、コナン君！」

「コナン、一体おまえどこ行ってたんだ！」

小五郎が言う。

「詳しい話はあと。とにかく、これ！」

とコナンがケースを差し出す。

「…それは、もしかして血液？」

「そうだよ。これを見つけて持ってきたんだ！」

「わかった。じゃ、先生呼んでくるからちよつと待ってて！」

そういつと蘭は病院の中に向かった。

それから2、3分して中島医師を連れて蘭が戻ってきた。

「血液を取り戻した、って本当かい、コナン君？」

「うん、これでいいんでしょ？」

そしてコナンからケースを受け取った中島医師がケースを調べる。
「よかった、これでいいんだ。ありがとう、コナン君。それじゃ、私は今からオペの準備をしますので」

そして中島医師はそこにいた全員に向かって一礼をすると病院の中に入っていった。

「ボクたちも行こうよ！」

そう言うコナンは病院のなかに入っていった。

「ちょ、ちよつとコナン君！」

蘭がコナンの後を着いていく。

それを見ていた小五郎も中に入ろうとするが、車内の藤田貴代に気が付くと、

「ちよつと待っててください、車椅子出しますんで」

*

そして藤田貴代の乗った車椅子を押して小五郎が病院の中に入ると、手術室の前にすで

にコナンと蘭の二人がいた。

「先生はどうした？」

「もうすぐ手術室に来るって」

それから程なく、一人の女性が彼らの前に現れた。

「あ、これはお母さん」

そう、その女性は都築ちはるの母親の都築真弓だった。

「中島先生から電話があつて、血液が見つかったそうですね」

「ええ。それで今、手術の準備を大急ぎでしているそうなんですよ」

それから程なく、ストレッチャーに乗せられたちはるが数人の看護師と共に手術室にや
つてきた。

「ちはる、頑張るのよ！」

さすがに母親として心配なのだろうか、真弓がちはるに話しかける。

「うん」

そして手術室にちはるが入ってまもなく、オペ服に着替えた中島医師が助手と共に現れた。

「先生、宜しくお願いします」

「大丈夫ですよ、お母さん」

そして中島医師は手術室に入っていった。

＊

それから1時間ほどして、手術室の前に目暮警部が現れた。

「あ、目暮警部。いったいどうしたんですか？」

小五郎が聞く。

「ああ。白バイ隊の退院から連絡があつて、血液が無事に取り戻され、ちはるちゃんの手

術が始まった、と聞いたので来たんだよ」

「それで、取調べのほうは？」

「ああ、二課のほうでやったそうだな。ここに来る前にどうなのか聞いておいたよ」

「それで？」

「どうやら間違いなさそうだな。いま、沖縄県警のほうにも確認を取っている最中だが、

連中は罪を認めているそうだし、病院からバンを盗んだことも自白したようだよ」

「それで一体何の目的で……」

「どうやら連中は新聞でちはるちゃんのことを知って、彼女の血液が特殊な血液型、と言

うことを知って、大金と引き返するために血液を盗んだようだ」

「いわば、誘拐みたいなものですか」

「まあ、そういうことになるだろうな」
「…全く何を考えているのやら」

それからさらに数十分が過ぎ、不意に「手術中」のランプが消えた。

そこにいた全員が手術質の扉に視線を向ける。
そして中島医師が手術室から出てきた。

「…先生、どうですか？」
都築真弓が聞く。

「大丈夫、上手く行きましたよ」

その言葉を聞いてその場にいた全員が安堵の声を上げた。

「これからしばらく様子を見なければいけませんけれど、近いうちに退院できると思いますよ」

「そうですか、ありがとうございます」

「いえいえ、私こそ皆さんにお礼が言いたいですよ。一時はどうなるかと思いましたが、

こうして手術ができたんですから」

「よかったね、コナン君」

蘭がコナンに言う。

「うん」

「…そうだ、思い出した！ おまえまた勝手なことしやがって！」

小五郎がコナンが一連の行動を思い出したか、コナンに言う。

「わあ、ご、ごめんなさい！」

（第6話に続く）

第5話（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等は「名探偵コナンノベルズ」のBBSの方をお願いします。

最終話

血液盗難事件が無事解決してからも同じ米花町内に住んでいる、と言ったこともあってか、蘭と藤田貴代は互いに連絡を取り合い、時間があるとお互いに行き来するようになっていった。

そして手術が終わったあとも時々には都築ちはるの見舞いに行き、彼女の相手が続けていた。

そんな中、熱戦が繰り広げられた北京五輪が8月24日に終わって数日が過ぎ、夏休みもそろそろ終わりというある日、毛利家に一本の電話が入ってきた。

「もしもし。あ、藤田さんですか」

電話に出た蘭が言う。それを聞いたコナンが蘭の傍らに近づく。

「はい、はい。ああ、そうですか。ええ、術後の経過は順調そうですね。はい。ええ、ちはるちゃんのほうは私が時々お見舞いに行きますので心配しないでください。それじゃ、がんばってくださいね」

そして蘭が電話を切る。

「電話、藤田さん？」

コナンが聞く。

「うん。今、成田から電話でこれからパラリンピックの日本代表選手団と一緒に北京に向かうんですって」

「ふーん。今から行くの？」

「うん。現地ですばらく練習をしてから競技に臨むんですって。でもよかったわ、ちはるちゃんの手術も無事に終わって術後の経過が順調だと言っし、藤田さんもとことなく嬉しそうな声をしてたわ」

「そうだね。これで心置きなく競技に打ち込めるからね。藤田さん、金メダルが取れるといいね」

「そうね」

＊

2008年9月17日。

史上最多の147の国と地域から約6500人が参加し、9月6日の開幕から12日間に及ぶ熱戦が繰り広げられた北京パラリンピックの最終日の夜のこと。

蘭は部屋にかかっている時計を見る。

「ああ、そうだ。もうすぐパラリンピックのダイジェスト放送が始まるんだ」

そう言うつと蘭はテレビのリモコンのスイッチを入れた。

オリンピックと違ってパラリンピックは（1998年に長野で冬季大会が開催されてから注目されて来ているとは言え）まだまだ知名度が低い部分があるようだが、それでも期間中は開会式がテレビで生中継されたり、毎日日本人選手の結果を伝えるダイジェスト番組を放送しているのだった。

そしてパラリンピックもまたオリンピック同様、最終日に最後の競技として開催されることになっているのだった。

「こんばんは」

テレビの中でキャスターが挨拶をした。

「12日間に及ぶ熱戦が繰り広げられた北京パラリンピックも、いよいよ今日が最終日となりました。今日は最後の競技であるマラソンと閉会式が行われました。まずはマラソンの模様からごらんいただきますよう」

そして他のクラス（パラリンピックは障害の度合いによってクラス分けがされている）の競技のダイジェストを放送した後、

「そして女子の車椅子マラソン。日本代表の藤田貴代選手、北京到着後も絶好調で、今日を迎えました」

その言葉を聞いた蘭とコナンはじっとテレビの画面を凝視する。そして女子の車椅子マラソンのダイジェストが放送された。

「スタート直後は選手が一団となって進行していましたが、25キロを過ぎたあたりから藤田選手がトップに立ちました」

そして、蘭が米花公園で見たレーシングスーツにヘルメットという姿でレース用車椅子を動かしている藤田貴代が映った。

「…そして藤田選手は快調なペースで独走態勢に入り、そのままゴール。見事大会新記録で金メダルを獲得いたしました」

「すごい。コナン君、金メダルだよ！」

蘭が何だか自分が獲ったような口調で言う。

「本当だね。藤田さん金メダル獲得できてよかったね」

そしてテレビの画面は競技後のインタビューの様子を放送していた。

「…なんかいつも以上に調子がよくて。それで35キロを過ぎたあたりからは新記録は行くかな、とは思っていたんですが」

「それで、次のロンドン大会ですが…」

「ええ、もちろん連覇を狙います」

「そうですか。それでは最後に何か一言」

「ちはるちゃん、やったよー！」

そう言うつと藤田貴代はカメラに向かって手を振る。

「…今、ちはるちゃんって言ったね」

コナンが言う。

「そうね。やはりちはるちゃんのことは北京に行っても気にしていたんだ」

蘭がそう言うつと、テレビのキャスターが

「…ご存知の方も多いと思いますが、ちはるちゃんというのは先日血液適合者が見つかって手術をした難病の女の子でして、藤田選手は彼女の知り合い、と言うことで帰国したら彼女にあって話をしたい、と言っていました」

それをコメントを聞いたコナンは思わず苦笑した。

*

そしてパラリンピックが終わり1週間ほど過ぎた9月20日。

コナン、蘭、そして藤田貴代の3人が病院の廊下を進んでいた。
「でも藤田さん、大変ですね。おととい帰国したばかりですよ
?」
」

車椅子を押している蘭が藤田貴代に言う。

そう、パラリンピックが終わった翌日の夜遅く、蘭の元に藤田貴代から帰国した、と言う電話がかかってきて、その電話で彼女が「土曜日にちはるちゃんのお見舞いに行こう」と誘ったのだった。

「…そうでもないわよ。北京から日本までは4時間かからないし、時差だって1時間だから時差ばけも起こらなかったわ。それに会社のほうも出勤は月曜日だから明日まではゆっくりと骨休めをするつもりよ」

「そうですか。それならいいんですけど」

「…ところで蘭さん、ちはるちゃんのほうはどうなの?」

「ええ、1週間に一度はお見舞いに行ったし、この間はコナン君に頼んでコナン君の同級生にもお見舞いに来てもらったんですよ」

（…そういうえばアイツらもあの子の病気のこと聞いて、かなり驚いてたようだな）

コナンは蘭に頼まれて少年探偵団を見舞いにつれてきた日のことを思い出していた。

（まあ、あの子も歩美とは気があったようだし、灰原も興味を覚えたりいろいろと話を聞いていたようだから、いい勉強になったかな）

蘭に頼まれたとき、コナンは連れて行くべきかどうか悩んだのだったが、事件のことを知っていたからか、彼らからも「会ってみたい」と言ってきたので連れて来たのだが、どうやら結果オーライでよかったのかもしれない。

*

そして「都築ちはる」とネームプレートがある病室のドアを開け

ると3人が病室に入っていた。

「ちはるちゃん、こんにちは」

藤田貴代が声をかけると、

「あ、お姉さん、お帰りなさい」

そして、

「こんにちは、ちはるちゃん」

蘭とコナンが挨拶をすると、

「あ、蘭おねえさん、コナン君。こんにちは」

都築ちはるが挨拶をする。その声はすっかり元気になっていた。

「…いつ日本に帰られたんですか？」

都築真弓が藤田貴代に聞く。

「あ、大会が終わった翌日に戻ってきたんです」

「まあ、それは大変でしたね」

「いえ、それほどでも。そういえばお母さん、先ほど主治医の先生に会って話をしたんですけれど、ちはるちゃん、もうすぐ退院できるそうですね」

「ええ。術後の経過も良好で、これからは定期的に通院すればいい、って先生がおっしゃったんですよ」

「そうですね、よかったですね」

「それで、この子も10月から学校に通わせようかと思っているんです」

「それがいいですね」

「でも担任の先生には時々、勉強を見てもらったんですけど、追いつけるかどうか心配で…」

「ちはるちゃんなら大丈夫ですよ。それに、夏休みにはコナン君に勉強見ってもらったし。ね、コナン君」

蘭が言っているとコナンが、

「そ、そうだったね」

（…ハハハ、まさかオレが家庭教師やる羽目になるとは思わなかったけどな）

「そうだ、ちはるちゃん。今日はちはるちゃんに見せたいものがあるんだ」

そう言っていると藤田貴代はケースを取り出す。

「はい」

「それ、何？」

「じゃーん！」

そう言っていると藤田貴代はケースのふたを開ける。

「あ、それはもしかして…」

コナンが言うと、

「そう、北京パラリンピックの金メダル。本物よ」

そう、ケースの中にはまだ新品の輝きが残っている金メダルが入っていたのだ。

蘭もコナンもこういった国際大会の金メダルというのは初めて間近で見るものだったから、思わず言葉を失ってしまった。

「そういえば藤田さん、大会新記録で優勝したんですね」

蘭が言うと、

「そう。いつもより調子よく走れたな、と思っていたらまさかの大会新記録ですものね。私自身が驚いたわ」

「そうですか…。そういえば藤田さん」

「何？」

「この間のテレビのインタビューで『ちはるちゃん、やったよー！』って言いましたよね？」

「ああ、それね。…実は、この金メダルはちはるちゃんが取らせてくれた金メダルだ、って思うの」

「ちはるちゃんが？」

「そう。蘭さんには話したと思うけれど、ちはるちゃんと知り合ってからなんていうのかな、この子のためにも頑張りたいな、って思うようになったの。私が一生懸命車椅子マラソンに打ち込むことで、ちはるちゃんにも病氣と戦う勇気が出てきてほしいな、って思うよ」

うになったし、その為にも北京では金メダルを取ってどんなことだ
ってやればできるんだ、っていうことを見せてあげたかったのよ」

「そうなんですか…」

「それに、何だか私もちはるちゃんから教わった気がするのよ」

「ちはるちゃんから？」

「うん。どんな困難にも勇気を持って立ち向かえば必ず打ち勝つこ
とができる、ってね。だから4年前と違って今度は絶対に金メダル
を取るんだ、って気持ちで立ち向かったの。だからもしちはるちゃ
んがいなかったら、私も金メダルを取れなかったかもしれないわね」
「…そうだったんですか」

と、

「ねえ、お姉さん」

ちはるが話しかけてきた。

「なに？」

「あたしもお姉さんみたいな人になりたいな」

「私みたいinna？」

「そう、お姉さんみたいにスポーツがうまくなって金メダルが取れ
るような人になりたいな」

「…それじゃ、まずはしっかりと病気を治さないね。ちはるちゃ
んの病気が治って、何かスポーツがやりたくなったらお姉さん、い
つでも手伝ってあげるから」

「本当？」

「本当だつて。約束する」

それから数日後、ちはるは病院を退院し、今は元気に学校に通っ
ている、と言う話をコナンたちは聞いた。

(終わり)

最終話（後書き）

こんにちは、ともゆきです。

今回の作品は一番最初に思い浮かんだのが第5話での「血液輸送シン」だったんですね。実は最初考えていたのは「藤田貴代がレース用車椅子を使って血液を運ぶ」と言うのを考えていたんですが、「いちいち自宅まで戻ってレース用車椅子に乗り換えてまでやるのかな」と考えて、結局「車を使う」と言う方法に変更せざるを得なかったのが少々残念でしたが…。

とはいえ世の中にはこういった障害を持っている人がいるのですから、皆さんも優しい心を持って接してほしいと思うし、こういった人たちが一般となら変わらない生活を送れるような世の中になってほしい、とささやかながら思っこの作品を書いてみましたが…。

それではまた。

尚、この作品に対する感想等は「名探偵コナンノベルズ」のBBSの方にお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2139f/>

夢をとめないでいて

2010年10月10日07時21分発行